



International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

Extended essay cover

Candidates must complete this page and then give this cover and their final version of the extended essay to their supervisor.

Candidate session number

Candidate name

School name

Examination session (May or November)

MAY

Year

2015

Diploma Programme subject in which this extended essay is registered: JAPANESE A

(For an extended essay in the area of languages, state the language and whether it is group 1 or group 2.)

Title of the extended essay: ロドリゴの聖人化から見るキリストとロドリゴの
距離の狭利

Candidate's declaration

This declaration must be signed by the candidate; otherwise a mark of zero will be issued.

The extended essay I am submitting is my own work (apart from guidance allowed by the International Baccalaureate).

I have acknowledged each use of the words, graphics or ideas of another person, whether written, oral or visual.

I am aware that the word limit for all extended essays is 4000 words and that examiners are not required to read beyond this limit.

This is the final version of my extended essay.

Candidate's signature:

Date: 12. Jan. 2015

Supervisor's report and declaration

The supervisor must complete this report, sign the declaration and then give the final version of the extended essay, with this cover attached, to the Diploma Programme coordinator.

Name of supervisor (CAPITAL letters)

Please comment, as appropriate, on the candidate's performance, the context in which the candidate undertook the research for the extended essay, any difficulties encountered and how these were overcome (see page 13 of the extended essay guide). The concluding interview (viva voce) may provide useful information. These comments can help the examiner award a level for criterion K (holistic judgment). Do not comment on any adverse personal circumstances that may have affected the candidate. If the amount of time spent with the candidate was zero, you must explain this, in particular how it was then possible to authenticate the essay as the candidate's own work. You may attach an additional sheet if there is insufficient space here.

小関は遠藤周作の『沈黙』を選んだ理由として、自身がキリスト教の学校に属していることを挙げている。作品自体が日本の歴史とキリスト教を扱っているため、自身の初めての経験となる宗教に関する授業や行事などの経験と照らし合わせられると考えたようだ。

本作品には数多くの先刻研究が存在するため、自分自身の独自の視点、課題の設定が難しかったという。実際、始めに設定した課題は先行研究において同様のものがあつたこと、さらに、小関が設定した課題そのものへの遠藤自身の見解が既に述べられていることを発見してしまったため、課題自体を変更することとしている。しかしながら、それらの多くの先行研究を読み、本作を分析していく過程で新しい見方、多方面からの見解を知ることにより、徐々に自分自身の切り口、見解が作られていくことになったと述べている。特にロドリゴとキリストの関係に焦点を当てて調べたことは意義があつたという。

論文作成の難しさとしては、自分の理解、見解、主張をどのように提出していけば読み手にしっかりと伝えられるのかということであるという。目次を一見して内容が理解できるか、論文の流れはどうかということに配慮した。

研究、論文作成の結果、自分自身の文章のくせが分かり、句読点の打ち方、漢字の重要さなどを再認識したという。同時に調査時に知ったキリスト教、キリスト教絵画、仏教についての知識も新しく、有益なものであつたと述べている。

Assessment form (for examiner use only)

Candidate session number

Criteria	Achievement level					
	Examiner 1	maximum	Examiner 2	maximum	Examiner 3	
A research question	2	2		2		
B introduction	2	2		2		
C investigation	4	4		4		
D knowledge and understanding	4	4		4		
E reasoned argument	4	4		4		
F analysis and evaluation	3	4		4		
G use of subject language	4	4		4		
H conclusion	2	2		2		
I formal presentation	4	4		4		
J abstract	2	2		2		
K holistic judgment	3	4		4		
Total out of 36	34					

Name of examiner 1: _____
(CAPITAL letters)

Examiner number: _____

Name of examiner 2: _____
(CAPITAL letters)

Examiner number: _____

Name of examiner 3: _____
(CAPITAL letters)

Examiner number: _____

IB Assessment Centre use only: B: _____

IB Assessment Centre use only: A: _____

Extended Essay
Japanese A Category 1

ロドリゴの聖人化から見る
キリストとロドリゴの距離の狭まり

**The narrowing of the distance between Rodrigo and Christ from
the view of Rodrigo's change to a saint**

Word count: 7857

May 2015

要旨

初めて『沈黙』を読んだ時、何度も繰り返されるキリストの姿の描写が気になった。図書館の書籍を用いたり、ネット上の論文を探したり、必要な資料は購入するなどして、先行研究や『沈黙』での時代背景、そして東洋と西洋の宗教観の違いについての理解を深めた。調べを進めていくうちに、キリストの姿とロドリゴの精神状態との比較、そしてキリストとロドリゴの距離感に関心が移った。

この距離については、これまで多くの研究がなされてきた。その中に、ヒロイズムに満ちていたロドリゴが弱者だと気付く様子や、踏み絵を踏むという、事実上の棄教を意味する行為からは、ロドリゴとキリストの距離は広がったように見えるという見解がある。

これに反して、私はこの点においてキリストとロドリゴの距離は狭まったと考えた。

この論文を作成するうえで、私は人間の欲、弱さ、そして醜さを俗物性の特徴として仮定し研究を進めた。度々繰り返される、ロドリゴが心の中で描くキリストの姿や、彼のキチジローに対する態度から、ロドリゴの俗物的な様子を分析した。そして、キチジローに対する寛容な態度への変化、棄教の決断からは、ロドリゴの俗物的な属性が次第に薄れていったことが分かった。つまり彼は聖人化していったと言える。私は、その変化から、ロドリゴとキリストとの共通点を見いだした。結果、「聖人化からみるキリストとロドリゴの距離の狭まり」が実証されたのではないかと考える。

目次

序論		1
本論		
1章	ロドリゴとキリストの距離の広がり -先行研究から-	2
2章	ロドリゴとキリストの距離の狭まり	
2-1	ロドリゴの俗物性	3
2-2	ロドリゴの聖人化	
2-2-1	キチジローに対する態度の変化からみるロドリゴの聖人化	5
2-2-2	絵踏みを通して分かるロドリゴの聖人化	7
結論		9
後注		10
参考文献		12

序論

この物語では、当初、宣教師としての熱意と自信に溢れ、かつ、ヒロイズムに満ちたロドリゴが、日本人信徒に対する迫害と彼らの死を目の当たりにすることにより、己の無力さを思い知らされ、最後には踏み絵を踏むことで、棄教する様子が描かれている。

粗谷甲一が「ロドリゴとフェレイラはキリスト教を曲げたのか、棄てたのか、それとも屈折したキリスト教を正して、新しく真実なキリスト教を生んだのか、この点が筆者が提起する第一の問題」¹ であると述べているように、キリストとロドリゴとの距離については、これまで多くの研究がなされてきた。

この問題について、私は、ロドリゴの極めて人間的な姿は、踏み絵を踏んだ後に皮肉にも、聖人的な姿へと変化し、キリストとの距離は縮まったのではないだろうかと考えた。なお、名誉や利益にとらわれてばかりいるつまらない²「俗物」に対して、「聖人」的な姿とは知徳のすぐれた理想的な人物³であると仮定する。「聖人」は「俗物」的な人物に比べ、キリストや仏により近い存在だと言える。

これらの仮定に基づき、「ロドリゴとキリストの距離」について、先行研究を比較対照としながら、分析していきたいと思う。

本論

1章 ロドリゴとキリストとの距離の広がり —先行研究から—

まず、多くの先行研究から「ロドリゴとキリストの距離」が広がったという考えを記しておきたい。この距離については様々な観点から研究がなされている。ここでは、その中でも、踏み絵を踏む行為、そして強者と弱者の関係の二つの観点から述べられている論をそれぞれ紹介する。

『沈黙』は発刊当初から、様々な機関から批判を受けてきた。鹿児島や長崎の学校では禁書とまでなった。さらにカトリック教会からも禁書扱いにされた。⁴「キリストとロドリゴの距離」も、カトリック教会の述べる禁書扱いの理由の一つであった。

キリスト教徒で、神父でもある、粕谷甲一は、『「沈黙」について』において、「日本のムードを通じて、キリスト教を受け止めたとすればそれは一歩あやまれば単に転びを肯定するのみならず、すすんで賛美する如きことにもなりかねず、(中略)キリスト教徒の本質的使命の崩壊を生むことに」⁵なると述べている。「転び」はキリスト教の棄教を意味する。つまり、絵踏み(ちなみに「絵踏み」とは「踏み絵」を踏むという行為を指し、「踏み絵」は踏まれる「絵そのもの」を指す。)という行為は棄教を意味し、信徒とキリストの間の距離は広がることになると述べている。

また、武田友寿は「遠藤文学の特徴的な姿勢は、「ヒロイズム」を粉飾している幻影の剥奪にある。」⁶と述べている。信仰や理想などといった幻影を追い求める行為はエゴイズムやヒロイズムの現れである。『沈黙』においては、ロドリゴが敬愛するキリストのように、彼も信徒に尊敬される存在になりたい、という願望によく表されていると思われる。そして作品を通して、彼が自身を弱者と自覚する様子を描き、最後の絵踏みという背教の行為は、彼の「幻影の剥奪」を示している。すなわち、宣教師としての誇りに満ち溢れ、強者としての幻影に包まれていた時のロドリゴに比べ、弱者であると自覚した彼とキリストとの距離は、広がると述べている。

2章 ロドリゴとキリストとの距離の狭まり

武田友寿氏が述べるヒロイズムから弱者への変化とカトリック教会の主張する絵踏みという行為に表されているように、一見、ロドリゴとキリストの距離は徐々に離れていったように見える。だが見方を変えてみると、作品を通して、ロドリゴは己の俗物性を棄て聖人化していくことで、両者の距離は近づいていったと考えることができる。この点を、武田氏が注目したキリストの描写、カトリック教会が注目した踏み絵を踏む行為の二つの観点から分析していく。

2-1 ロドリゴの俗物性

まず、俗物とは欲望、弱さ、醜さを持つ人間と仮定し、論を進めたい。この仮定は以下の私の論証により、裏付けられ証明されると信じる。

作品中のキリストの描写を分析するとロドリゴの俗物性が明らかになる。四つの例とともに、分析していく。ロドリゴが心の中に基督の姿を思い描く様子は、作品中に何度も描かれている。キリストの姿、そして表情を思い浮かべる行為は、ロドリゴの癖とも言える。

①

マカオから日本に移動する間、ロドリゴが思い浮かべるキリストの顔は「ボルゴ・サンセポルクロに蔵されている⁷⁾」絵である。そしてキリストの表情は「使徒たちにむかい「我が羔を牧せよ。我が羔を牧せよ。我が羔を牧せよ」と三度、命ぜられた時の励ますような雄々しい力強い顔⁸⁾」とある。

ロドリゴは自分をキリストと重ね合わせ、日本人信徒を使徒に見立てている。キリストの顔は威厳にあふれ、多くの使徒はキリストの話に真剣に耳を傾けていた。キリストが沢山の山の人々に教えを説いたように、ロドリゴも日本人信徒を導いていく自身のこれからの姿を想像しているように見える。

キリストの行動を模倣するという行動からは、ロドリゴのキリストに対する憧れを読み取ることができる。また、宣教師であることに、選民意識を抱き、信徒に対して優越を感じている様子が窺われる。

②

同僚のガルペと別れ、暗闇の中をさまよっている間、「十字架上で基督が舐めた酢の味⁹⁾」をロドリゴは考えている。仲間と別れ、暗く寒い中、彷徨って、ロドリゴは孤独を感じ、不安を抱いている。辛酸を舐めるという言葉があるように十字架上の基督も辛い状況に耐えた。ロドリゴは、自分も同じく司祭であるからにはキリストのように、辛い状況下においても、決して弱音を吐いてはならない、と自尊心を保とうとする。

そしてこの辛い状況下での、彼の頭の中に浮かんでくる基督の表情は「疲れ凹ん¹⁰⁾」でいるとある。キリストの表情はロドリゴの精神状態を表していると考えられる。キリストの顔の表情からも、ロドリゴがいかに、精神的に苦しい状態であったのかが窺える。その

苦しさは、暗闇や孤独な状況下でこみ上げる寂しさや不安であり、人間の弱さでもある。同じく、ロドリゴの頭の中には、新たな日本人信徒との出会いの可能性を見捨てることは臆病や卑怯であるといった考えもよぎる。

臆病者や卑怯者と呼ばわりをされることを恐れるプライドの高さも、人から良く見られたいという見栄や欲望であると考ええる。

③

キリストの姿を心の中に浮かべる沢山の描写の中でも、彼が無意識のうちにキリストの姿を考えている描写がある。「午後の光にかがやいた湾のむこうに大きな入道雲が金色に縁どられながら湧いていた。雲はなぜか空の宮殿のように白く巨大だった。今まで数限りなく入道雲を眺めながら、司祭はそれをこのような感情で眺めたことはなかった」¹¹とある。この雲の表現は「神殿からは、一つは長く、一つは短く、また短く、三つの喇叭の音がひび」¹²いたキリストの殉教場面を思い起こさせる。ロドリゴは、キリストが遂げたような殉教を夢見ているのだろう。心の中に潜むロドリゴのキリストに対する強い憧れが、今まで抱いたことのない感情を沸き起こさせている。

キリストはユダの裏切りによって捕われの身となり、群衆に囲まれ、ピラトというその土地の権力者によって裁かれた。そして今、ロドリゴはキチジローの裏切りによって捕われの身となり、百姓に囲まれ、井上筑後守によって裁かれようとしている。ロドリゴは、自分がキリストと同じ境遇にあることに喜びを感じ、自己陶醉していると判断できよう。彼にとってキリストがいかに英雄のような存在であったのかが窺われる。ここからは、キリストに対する過度な憧れが見て取れる。

④

ロドリゴにとって、子供の頃から、キリストは敬慕する存在であり、苦しい時は心の拠り所としていた。井上や通辞による取り調べも終わると、己の身に死が近づいていることを実感し始める。以前までは基督と同じ状況で死が訪れることに対しての喜びを感じ、死に対する恐怖はあまり抱いていなかった。

しかし、「今はあの人が自分と同じように死の恐怖を味わったという事実も、慰めとはならなかった。」¹³とあるように、暗闇で無音の中、それまで常に心の支えであったキリストの顔を思い浮かべる行為でさえ、彼の心を安らげることは出来なくなっていたのだ。彼の心の中はキリストに対する憧れよりも死への恐怖の方が大きくなっていることが分かる。死は人間に必ず訪れるものであり、その死に対する恐怖には人間特有の弱さが反映されていると言えよう。

全部で十五箇所以上もあるキリストの描写の中から、論を進めるにあたり重要だと考えた四つの例を選び、分析してきた。基督を心の中に描くロドリゴの癖の分析から、彼の俗物的三つの性格のうちの「欲望」と「弱さ」の二つが分かった。

ロドリゴの基督への強い憧れ、聖職者であるという優越感や選民意識、そして見栄は、信徒に尊敬される存在でありたいという人間の欲の現れである。また、暗闇で彼に迫り来る孤独や寂しさ、不安、迫り来る死の恐怖は人間の弱さを表していると考えられる。

ロドリゴの行動にも、後述するように人間の醜さが見られる箇所がある。しかし、踏み絵を踏んだ後、彼の俗物的な「醜さ」は変化する。次にロドリゴの俗物的な醜さとその変化に注目していく。

2-2 ロドリゴの聖人化

踏み絵を踏む前のロドリゴには至るところに世俗的な一面が見られた。だが、この俗物性は次第に変化し、踏み絵を踏んだ後は消える。世俗的な醜さがよく描かれているロドリゴとキチジローとの関係、そして踏み絵を踏む前後のロドリゴのキリスト教に対する態度の変化について、それぞれ見ていく。

1) キチジローに対する態度の変化からみるロドリゴの聖人化

ロドリゴの俗物的な醜さはキチジローとの関係性によく表されている。踏み絵を踏んだ前後では、キチジローに対するロドリゴの態度は変化する。順に追って、分析していきたいと思う。

①

キチジローに対するロドリゴの第一印象は「彼にはかなり狡い性格があり、その狡さもこの男の弱さから生まれている」¹⁴とあり、そして「はじめ水夫たちと同様に私たちも、そんな彼を軽蔑して眺めておりました」¹⁵とある。

キチジローと出会ってまだ、日が浅いにも関わらず、ロドリゴは、キチジローを弱虫であると蔑み、見下していたことが分かる。キチジローに対するロドリゴの態度には、彼の弱者に対する態度が表されていると考える。宣教師としての強い意思を持って異国にやってきた自分と弱者とを比べ、優越感を抱いているのだろう。

②

また、ロドリゴはキチジローに対して疑念を抱く。例えば、キチジローが仲間を呼んでくると言い、なかなか姿を現さない時である。同僚ガルペは「臆病者はどこかに行ってしまった」¹⁶のだろうと、キチジローの弱さに不安を抱いている。一方でロドリゴは、「彼はにげたのではない。ユダのように訴えにいったのだ」¹⁷とあるように、キチジローの裏切りを懸念している。疑いを捨てきれない、ロドリゴの世俗的な醜さの現れである。

③

キチジローの裏切りにより、ロドリゴは捕われの身になった。ロドリゴはキチジローを恨み、憎しみや怒り、不信を抱いている。キチジローに対する「悪人にも値しない」¹⁸と述べるほどの過小評価からも、ロドリゴのキチジローへの嫌悪が分かる。

④

キリストは、裏切り者であるユダも含め、どんな人間でも愛した。しかし、ロドリゴはキチジローを許し愛することができない。そのような己とキリストの行動と比べ、劣等感を抱くようになる。既述したように、ロドリゴの精神状態は彼の心の中で描かれるキリストの姿に表されている。そんな時、ロドリゴが思い浮かべるキリストは「自分に近づき、うるんだ。やさしい眼でじっとこちらを見つめた」¹⁹ 顔である。キチジローを許すことができない自分の姿をキリストに見られているようで、己の不甲斐なさを痛感しているようにみられる。キリストの眼差しは、まるで、俗物的な醜さがにじみ出るロドリゴを憐れんでいるようである。これまで、キチジローに対し、憎しみや嫌悪を抱いていたロドリゴが、自身の行動の醜さに気付いたと考えることができる。

他人に対して抱く優越感や嫌悪、そして、憎しみや猜疑心は世俗的な醜さと言えよう。ロドリゴは、キチジローに対して俗物的な感情を抱くだけであつたのに対し、次第にそのような感情を抱く自分を恥じるようになる。踏み絵を踏んだ後、ロドリゴのキチジローに対する俗物的な感情は薄れる。

⑤

作品中で、踏み絵を踏んだ後のロドリゴの様子は、多くは語られていない。だが、限られた描写の中に、ロドリゴの変化が描かれている。キチジローがロドリゴの下を訪れる場面である。キリストがユダに「去れ、行きて汝のなすことをなせ」と説いたように、ロドリゴはキチジローに対して「安心して行きなさい」²⁰ と許しの秘蹟を与える。踏み絵を踏む前にはキチジローのことを憎むことしかできなかった。だが、踏んだ後、ロドリゴはキチジローを許している様子からは、彼の世俗的な醜さが消えたと考えることができる。踏み絵を踏んだ後のロドリゴに、全ての人を愛するキリストに似た聖人性が現れたのだ。

⑥

キチジローへの許しは、作品の最後、漢文調で書かれている『切支丹屋敷日記』からも窺われる。この日記の中にはロドリゴの日本名「岡田三右衛門」そして、キチジローの名が「吉次郎」として、度々登場している。そしてキチジローの名が初めて登場する時、「中間吉次郎」²¹と記されている。中間とは江戸時代、武士に仕えて雑務に従った総称である。²²

つまり、ロドリゴがキチジローに対し許しを与えた後も、キチジローは、ロドリゴの傍に居たということである。ロドリゴが、裏切り者であるキチジローと共に暮らすことができたのも、ロドリゴがキチジローに対する憎しみを棄て、彼を許した故ではなかろうか。ここからもロドリゴが聖人化した様子が窺われる。

キチジローに対するロドリゴの態度の変化を見てきた。キチジローに対して、初対面の時から抱いていた嫌悪感や蔑み、これらは世俗的な「醜さ」と言える。だが、この醜さは次第に消えて行き、作品の最後では、キチジローに対して寛容の心が芽生えた。この寛容の心は、仏の「慈悲の心」²³ やキリスト教における「慈愛や哀憐を含む真のメシア」²⁴ に

見られる。よってこの変化からは、ロドリゴが仏やキリストに近づいたことが分かる。彼の聖人化した証であると考えることができよう。

2) 絵踏みを通して分かるロドリゴの聖人化

作品の終盤では、ロドリゴが踏み絵を踏んだ。生涯を通して崇拝してきたキリストの姿を踏み踏むことは彼にとって辛いものである。いったい、何が彼の絵踏みの決断をさせたのだろうか。この決断からも彼の聖人化した様子が分かる。

「わしは弱か。わしはモキチやイチゾウんごたっ強か者にはなりきりまっせん」²⁵と、キチジローが述べているように、死を恐れずに信仰を続けることのできる人間は強い人間であると述べられている。だが、違った視点からみると、この信仰の強さも、人間の醜さと考えることができる。宗教を信仰することは個人の自由である。まして、キリスト教は当時、禁教であった。自らの身を投げ打ってまで、己の信仰の欲を押し通そうとするのは、己の満足を第一に考えるという俗物的な強情さや頑固さの現れではないだろうか。

フェレイラの行動に注目してみるとその強情さがよく分かる。フェレイラは踏み絵を踏むことで棄教した。もうキリスト教徒ではないにも関わらず、彼の行動からはキリスト教に対する未練や、微かな信仰心が読みとることができる。「フェレイラは他人に自分が有益でありたいという昔の思い出にすがりついているように見える。」²⁶とある。かつてのフェレイラ師は、宣教師としての役目を果たし、信徒に尊敬される存在であった。また、「人々のために有益であり役に経つことは聖職者たちのただ一つの願いであり夢であ」²⁷るため、棄教後も、彼は西洋の書物の翻訳など、人の役に立とうとしている。キリスト教を誤りだと述べる『頭偽録』の執筆を進める行為は、人生を通して信仰を続けてきたフェレイラにとって、辛いものであろう。宣教師や「神父たちの孤独とは自分が他人のために無益である時」²⁸とある。前章で、孤独に対する恐怖は俗物的な「弱さ」の現れであると述べた。その孤独から逃れるために執筆活動続けるフェレイラの行動からも、彼がいかに、宣教師としての誇りや過去を捨てられないのかが分かる。棄教後のフェレイラには、いまだ、世俗的な頑固さ、そして弱さが見られる。

一方でロドリゴは「聖職者たちはこの冒流の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼らを裏切ってもあの人を決して裏切っていない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。」²⁹と述べている。ロドリゴも踏み絵を踏んだ後、キリストに対する信仰を完全に絶ったわけではない。だが、宣教師として生きていた頃とは違った形でキリストを敬愛することに決めた。

ロドリゴは、自分の代わりに苦しみに耐えている信徒を救うため、己の信仰を捨てる決断をした。踏み絵に足を掛けることは事実上の棄教である。つまり、それは、これまでのキリストを崇敬してきた彼の人生を否定することを意味する。ロドリゴもフェレイラも信徒を救うために棄教を選んだという点では同じであり、両者とも信仰という、己の欲を捨てた。だが、棄教後のフェレイラには、まだキリスト教に対する未練が残っていることから、俗物的な一面が垣間見られる。だが、ロドリゴはカトリック教会の説くキリスト教とは形は異なるが、キリストに対する信仰を続けると決意した。つまり、それまでの世俗的

な欲を完全に消し去ったと考えることができる。そして、ここからもロドリゴは聖人化した、と、考えることができるのではないだろうか。

二つの観点から、ロドリゴが聖人化した様子を分析してきた。ロドリゴの「醜さ」を初めとする世俗的な部分は次第に薄れていく。そして、裏切り者を許す、より多くの人々を救うための決断をするといった行為からは、キリストの行動と共通点を見いだすことができた。以上のことから、踏み絵を踏んだ後のロドリゴからそれまでの俗物性が消え去り、聖人的な一面が現れたと考える。聖人化した彼と、キリストとの距離はより近づいたと言えよう。

結論

先行研究を分析し、それらとの比較を行ないながら、「ロドリゴとキリストの距離」について見てきた。

絵踏みという、事実上の棄教行為やヒロイズムの崩壊、そして弱者としての自覚からは、キリストとロドリゴの距離は一見、広がったように見える。しかし、分析を通して両者の距離は近づいたことが分かった。キリストの姿を思い描く彼の癖に注目してみると、踏み絵を踏む前のロドリゴには、欲深さや弱さという、俗物的な一面が顕著に見られた。しかし、彼は信徒を救うために、生涯を通して続けてきたキリスト教の信仰という我欲を棄てる決断をする。そしてロドリゴは踏み絵を踏んだ。

その後のキチジローに対するロドリゴの態度の変化から分かるように、彼の心の中からは俗物的な醜さが払拭され、寛容さを持つ聖人的な一面が現れたのだ。極めて世俗的であったロドリゴは聖人化したと考えることができよう。聖人と化したロドリゴとキリストの距離は狭まったと言える。

脚注

- [1] 粗谷甲一 「『沈黙』について」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹.クレス出版. 42頁 13行目
- [2] 「俗物」 新村出 『広辞苑 第六版』岩波書店.
- [3] 「聖人」 山田忠雄 『新明解国語辞典 第七版』三省堂.
- [4] 石内徹「解説」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹.クレス出版. 359頁 10行目
- [5] 粕谷甲一 『『沈黙』について』 42頁 7行目
- [6] 武田友寿 「『沈黙』の世界一弱者の倫理」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹.クレス出版 152頁 1行目
- [7] 遠藤周作『沈黙』新潮社. 31頁 4行目
- [8] 同 31頁 8行目
- [9] 同 95頁 15行目
- [10] 同 103頁 5行目
- [11] 同 248頁 11行目
- [12] 同 188頁 11行目
- [13] 同 253頁 11行目
- [14] 同 27頁 11行目
- [15] 同 34頁 6行目
- [16] 同 37頁 10行目
- [17] 同 37頁 12行目
- [18] 同 182頁 1行目
- [19] 同 182頁 12行目
- [20] 同 295頁 2行目

[21] 同 298 頁 8 行目

[22] 「中間」 広辞苑 第六版. 岩波書店

[23] 奈良康明「仏教の人間観」 『多神と一神との邂逅—日本の精神文化とキリスト教』. 越前喜六. 平河出版社. 50 頁

[24] 越前喜六「キリストの愛」 『多神と一神との邂逅—日本の精神文化とキリスト教』. 越前喜六. 平河出版社. 229 頁

[25] 遠藤周作『沈黙』 新潮社. 122 頁 11 行目

[26] 同 226 頁 5 行目

[27] 同 227 頁 2 行目

[28] 同 227 頁 3 行目

[29] 同 295 頁 5 行目

参考文献

粗谷甲一 (2002) 「『沈黙』について」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹.クレス出版

石内徹 (2002) 「遠藤周作『沈黙』論」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹.クレス出版

遠藤周作 (1981) 『沈黙』新潮社.

遠藤周作 (2000) 「異邦人の苦悩」 『遠藤周作文学全集 第十三巻.遠藤周作.新潮社

越前喜六 (1986) 「キリストの愛」 『多神と一神との邂逅 -日本の精神文化とキリスト教』
.越前喜六.平河出版社

新村出 (2008) 『広辞苑 第六版』岩波書店.

武田友寿 (2002) 「『沈黙』の世界 -弱者の論理-」 『遠藤周作『沈黙』作品論集』.石内徹
.クレス出版

田中久美子 (2011) 『西洋美術で読み解くキリスト教』宝島社.

奈良康明 (1986) 「仏教の人間観」 『多神と一神との邂逅 -日本の精神文化とキリスト教』
.越前喜六.平河出版社

山田忠雄 (2011) 『新明解国語辞典 第七版』三省堂.

A 2

B 2

C 4

D 4

E 4

F 3

G 4

H 2

I 4

J 2

K 3

(34)